新学習指導要領対応 明日の授業を創る ―研究者とともに―

今回は小学校・生活科と外国語活動を取り上げる。生活科では自らの成長への気付きを深める実践例、外国語活動では、コミュニケーション力を高める指導の工夫など紹介。

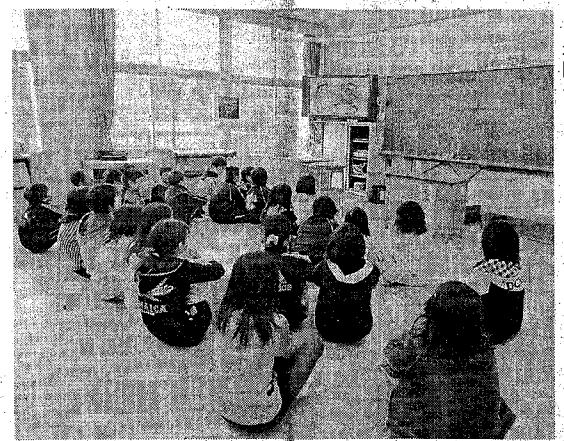
小学校外国語活動 中学校英語を見据え

愛知県岡崎市立本宿小学校 白井 直美 校長

愛知教育大学外国語教育講座主催による愛知教育大学小中学校支援室創設記念講演会がこのほど開かれ、シンポジウムでは、「中学校英語を見据えた小学校外国語活動―これからの小学校外国語活動を創る」と題して、白井直美・愛知県岡崎市立本宿小校長と小川恵子・安城市立里町小教諭が、それぞれ実践事例を報告した。

◇「聞く力」を育み、積極的にコミュニケーションを図ろ

コミュニケーション力育成へ 毎朝ビデオ視聴



8分間のビデオを毎日視聴する児童たち

うとする子供の育成」をテーマに研究をしている岡崎市立本宿小学校。岡崎市では、47の全小学校が特例校となって、週1時間の外国語活動のほかに毎日8分間のビデオを、朝や昼の帯の時間帯に流して活用している。本宿小では、既に平成8年から中学校のALTに来てもらったり、朝の時間帯にビデオを視聴する活動を行ってきた。19年度の2学期から、岡崎市が作成した独自ビデオ「岡崎キッズイングリッシュ」の視聴を始めた。同校では、朝の8分間を「Eタイム」としてビデオを視聴する時間にしている。また全校英語集会など、実際に学校生活の中で英語を使ってみる場なども工夫してきた。

授業ビデオは、本宿小では5年用と6年用の内容を変えている。また音声言語を中心に体験的な活動を重視するとともに、中学校へのつながりをカリキュラムで意識するようにしたという。

ビデオは30レッスンあり、本宿小では、週替わりで毎日視聴するというスタイル。授業は3人体制で、担任とALTにST(英語補助者、英語に堪能な日本人)が担当する方式。本宿小では週2回は3人体制の授業としている。担任が主導しているが、8人のミーティングなども重視している。授業時間は高学年の35時間のほか中学年は25時間、低学年は10時間。ただ低学年は30分を15回などと弾力的に運用している。

同校ではビデオの視聴に際して、各教室の50インチのデジタルテレビが効果を発揮しているが、英語ノートの内容のソフトや自作した教材の提示、電子黒板などICT活用も進めているところだ。

白井校長は「担任が授業の力を付けることが、外国語活動が成功する近道」と指摘した。

本宿小=☎0564・48・2504

◇

一方、安城市立里町小学校の小川恵子教諭は、中学校で英語を指導してきた経験を踏まえて、小学校の良さを生かした授業づくりの必要性を訴えた。

小川教諭は「体全体を使うなど小学生は楽しもうに表現する良さがある。担任も子どもの普段の様子を知っており、発問や指示に生かすことができる。他教科で学んだことと関連した表現活動を工夫できるのも小学校の良さ。自分の発音を気にする人もいるが、外国語活動は発音の美しさを目的にしておらず、コミュニケーション能力の素地を養うのが目的ということを押さえたい」と指摘する。

里町小学校でも、「誰でもできる外国語活動」を目指してきた。子どもたちの「コミュニケーションしたい」という思いから出発した活動が多い。里町小コミュニケーション活動を行う予定である。

里町小では、目の前の子どもたちの状態に合った教材を先生方が工夫して作っている。

教材作り、例えばセンの小川教諭はもとも、「活動になっている。本宿小も里町小も、9月29日には自主公開研究会を開き、シンポールの子どもたちとと、中学校で英語を指導していたため、小学校の外国語活動から中学校の英語につなげる時間が増える中学校で、どう育てていくのかなど、小学校の出口と中学校の入り口の「糊代」の部分を研究していきたいと考えている。

中学校の英語科免許を取得しようとしている学生にも小学校の外国語活動の現場を知る場も予定している。

中学校の教員は忙しくて小学校の授業を見る機会がなく、小学校の教員も外国語活動がどう中学校につながるのかが見えない不安がある。こうした不安に応えるとともに、文学や言語学など、幅広い視点、かつ英語教育学の学術なより深い視点で研究者と現場の教師が連携できる点を生かせればと考えている。

興味・関心踏まえ教材作り

高橋 美由紀・愛知教育大学教授

岡崎市では、教員がALTと一緒に、誰でも指導できる授業DVDを独自に作成している。スキットや音声チャンツなど、普段の授業で使えるもので、担任中心の外国語活動をサポートしている。昼休みなどに画面のチャンツの様子を見ながら実際に教室でもインタラクティブに使えるのが魅力だ。これを帯の時間に活用することで週1回の授業と相まって、定着度も高い。

例えば、「世界の朝ごはん」の題材も実際のALTに取材した。その中で、子どもたちは自分たちの実際の朝ご飯を表現したいと意欲を持った。教材作りにおいて、子どもたちの興味・関心を踏まえて、経験してきた小学校の「言われ」から「言いた

業生を、1時間授業

テンス単位で表現した り、中学校の語彙を意識して工夫している。

愛知教育大学では、本年度から「小中学校英語教育支援室」を設置、小・中の連携の支援を行っている。特に、さまざまな外国語活動を

次回は「小学校・総合的な学習、中学校・国語」

Web に関連資料を掲載